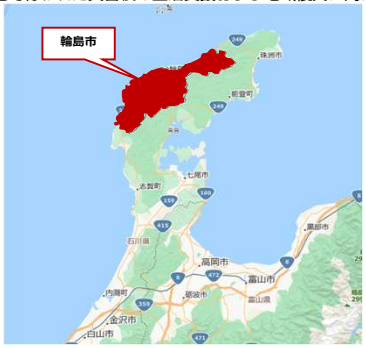
令和6年9月 能登半島豪雨 輪島市 災害ボランティア 活動報告

学　　生：小嶋 悠太、小林 柊颯、久村 花梨、梅本 結奈、熊田 隼翔、篠田 倖代、中島 南瑞菜、沼澤　颯、比嘉 琥、深川 武彦、松原 智輝、三島 柚子
木村　磨功、宮川 大和
大学院生：増留 流輝(厚生労働省DMAT事務局)、片平 達也、相坂 颯汰、糟谷 一心、櫻澤 玲、堀込 実希、増田 尋斗
教　　員：小川 理郎、中澤 真弓、藤本 憲司、宮永 彩加、三橋 正典

1　はじめに

令和6年1月1日に発生した令和6年能登半島地震により、能登半島全域が甚大な被害を受けました。その後、復興活動が進められている中、令和6年9月21日に台風14号が温帯低気圧に変わり、活発な秋雨前線や線状降水帯の影響で石川県奥能登地方（能登半島北部）を中心に記録的な豪雨が発生しました。短時間に激しい雨が降り続け、輪島市、珠洲市、能登町では警戒レベル5の「大雨特別警報」が発令されました。この豪雨により、道路の冠水や土砂崩れが多発し、診療所が床上浸水するなど、地域の医療提供が困難な状況となり、早急な復旧が求められました。日本体育大学救急医療学科は、石川県庁健康福祉部医療対策課から診療所等の復旧支援依頼を受け、輪島市で災害ボランティア活動を実施しました。本報告では、現地で行われた災害後の生活支援および地域復興に向けた活動について報告します。



石川県 輪島市

堅牢な塗りと加飾の優美な輪島塗

輪島朝市名物 えがら饅頭

2　現地派遣期間

派遣チーム	日　程	派遣者
第1団	9月26日（木）～9月29日（日）	大学院生５名
第2団	9月27日（金）	教員１名
第3団	9月28日（土）～9月29日（日）	教員２名、学生１２名
第４団	9月29日（日）	教員２名

3　現地の被害状況

① 道路冠水による被害

② 濁流に流された車

③ 床上浸水した診療所

4　ごちゃまるクリニックでの活動

① ボイラー室内での泥の撤去

② 床下に侵入した泥の撤去

5　公共施設でのボランティア活動

1）活動場所
　① 輪島市役所健康福祉部 ふれあい健康センター
　② 輪島市町野町多目的集会施設
2）内　容
　① 家財の整理と運搬
　② 泥の撤去など
3）泥は、河川と汚水で汚染されており、細菌やカビが繁殖しやすく、破傷風、レジオネラ症、レプトスピラ症などの感染症に注意が必要でした。
4）泥や乾燥して飛散した粉じんを誤って飲み込まないよう、作業前には、帽子、ゴーグル、防塵マスクで汚染防止と感染対策を行い活動しました。

① 敷地に堆積した土の撤去

② 施設内の泥の除去と清掃

③ 仮置き場への家財の運搬

6　住宅での活動

1）活動場所
　輪島市内住宅
2）活動内容
　① 屋内の泥の撤去
　② 畳と家財の運搬
3）河川の氾濫により被災した地域の住宅では、床上浸水によって畳や家具に泥水が染み込み、その撤去は困難を極めました。学生ボランティアは、汚損した畳の搬出や室内の清掃、家具の整理を行い、被災した住民の生活環境と衛生状態の改善に大きく貢献しました。

① 泥水の染み込んだ畳の撤去

② 家具の撤去と整理整頓

③ 泥の除去と室内の清掃

高齢者の多い地域では、畳の搬出や室内の清掃、家具の整理が極めて困難を極めていました。
学生たちの支援により、作業が円滑に進み、復旧が加速したことで、地域の負担が大幅に軽減されました。学生たちは、言葉遣いや態度に細心の注意を払い、地域の方々に丁寧に寄り添いながら支援を行いました。その結果、地域住民との絆を深めることができ、地域の方々から心のこもった感謝の言葉をいただきました。学生たちは実際の災害現場で活動することで被害の深刻さと支援活動の困難さを体験し、困難に立ち向かう医療人としての奉仕の精神を学ぶ貴重な機会となりました。

7　関係機関への訪問

① 輪島市役所 訪問

② 輪島市役所 DMAT本部 訪問

8　学生から見た支援活動

片平 達也

日常が災害で一瞬にして変わる現実を痛感しました。被災地での活動では、周囲との意見交換や工夫が不可欠であること、そして物品の準備を自身で行う重要性を学びました。被災者の方々とお話しし、前向きに頑張る姿に感動する一方、疲弊された方々の姿も胸に刻み込みました。復興しかけていた中で再び打撃を受けた状況を知り、今回のこの体験を活かし、今後も支援に取り組みたいと強く思いました。

相坂 颯汰

今回の能登豪雨災害は、能登半島震災から人々が復興しようとしている中で起きた災害でした。被災地での活動では、肉体的にも精神的にもしんどくなるような時が多々ありました。しかし、どんな時でも前向きに取り組むこと、そして、我々が一生懸命活動している姿で被災地の方々へ少しでも希望や勇気を与えられるようにと思い活動していました。我々が中国の活動で被災地の方々の力になれたのかは実際には分かりません。しかし、今回チームで一片の悔いがなく全力で活動できたことは事実です。今後も前向きにこのような活動を行い、貢献していきたいと思いました。

糟谷 一心

今回の支援では、初動と後方支援という形で携わらせていただきました。事前に情報を集め、準備を整えて活動する重要性を改めて感じました。最低限のマナーや礼儀を事前に学ぶことの必要性や、後方支援の役割の大切さも実感しました。また、仲間や後輩の報告を聞き、自分もさらに支援に取り組むべきだと強く思いました。いつか現地で直接貢献できるよう、これまで学ばせていただいたこの地への恩返しを目指して、自分自身を磨いていきたいと思います。

櫻澤 玲

今回の派遣では、現地の地域性や文化、特産に触れながら、被災状況の深刻さを実感しました。被災者の方々との接し方や、自分たちの活動方法に多くの課題を感じ、まだできることがたくさんあると痛感しました。傾聴に努めましたが、どんな返答が適切か、4日間では答えを見つけられませんでした。それでも一定の達成感を得られたことに感謝し、今後さらに自分の力を高め、支援活動に貢献したいと感じました。

堀込 実希

能登半島地震のボランティア活動を通じて、わずかではありますが、東日本大震災の支援の恩返しができたような気がしています。また、この活動をこのメンバーと一緒に行えたことが本当に良かったと感じています。メンバーの協力がなければ、ここまでの成果を得ることはできなかったと思います。今回の経験は、自分自身の視野を広げ、新しい知見を摂りやすい大きな機会となりました。被災地での現場を通じて得た学びを大切にし、今後も自分にできることを模索しながら、支援活動に活かしていきたいと思います。

増田 尋斗

支援活動において自分が動くだけでなく、後輩を動かし管理する難しさを痛感しました。円滑な活動のためには、マネジメント能力やコミュニケーション能力をさらに向上させる必要があると感じました。また、被災者や支援者への精神的サポートや自己管理能力の重要性を実感し、それを学ぶ必要性を強く認識しました。現地の方々が希望を持つ姿に励まされる一方、その裏の本当の思いを理解し、寄り添える人間力を磨きたいと思いました。今後も少しでも復旧・復興に貢献できるよう、活動を続けていきたいです。

木村 磨功

令和6年能登半島地震で、災害初動、先生方と先輩方の派遣、日体大ボランティアチーム等の後方支援をさせていただきました。自分自身の能力やノウハウ、知識、人間力の全ての要素が、現場で活動されている派遣隊に大きく影響することを学びました。『全ては、被災者のために』を常に思い、後方支援は自宅で行なっておりましたが、心は被災地にあり派遣隊と共に奮闘しておりました。ですが、自分の能力の低さを実感し、様々なことを経験する必要性を感じました。そのため、更なる後方支援チームのレベルアップと自己の成長をしていきます。

宮川 大和

事前に情報を集め、準備を整えて活動する重要性を改めて感じました。今回、自分は後方支援として写真の整理やクロノロの添削、マップ作成を担当しました。初めての後方支援だったため課題も残りましたが、その役割の大切さを実感しました。仲間や後輩の報告を聞き、自分もさらに支援に取り組むべきだと感じています。次回はより良いバックアップができるよう努めるとともに、いつか現地で直接貢献できるよう自分を磨いていきたいと思います。

小嶋 悠太

被災地を訪れることで、自分が持っていた一面的なイメージが大きく覆されました。泥の重さや畳を運ぶ大変さ、テレビ画面からは伝わらない強烈な匂いといった現場のリアルを体感し、テレビで得る情報がズレ一部に過ぎないことを痛感しました。また、復興に向けて被災された方々を協力し合い、力強く前進する姿に深い感銘を受けるとともに、逆に私自身が勇気をもらう場面もありました。この体験を通じて、能登や輪島の現状を学び、自分自身を見つめ直す機会となりました。これからも現地の方々の思いに応えるために、自分に何ができるかを考え続けたいと思います。

小林 柊颯

コミュニケーションの大切さと行動力の重要性を学びました。被災者の方々に前向きな声をかけ、チームとして協力することで士気が高まりました。また、率先して行動する姿が被災者の方々の背中を押すかになると実感しました。能登の皆さんの復興への想いに触れ、普通の生活の幸せを改めて感じるとともに、被災者の心のケアが重要だと考えました。この経験を忘れず、次回も積極的に支援活動に参加したいと思います。

久村 花梨

派遣先では、ニュース映像では伝わらない現地の広範囲にわたる被害や空気感を実感しました。床上浸水の自宅でお手伝いをしましたが、わずかな支援にも感謝され、その方の日々の辛い生活を思うと胸が締め付けられました。目の前に川があり、周囲には地震や土砂崩れで倒壊した家々がある環境で生活する大変さを、自分の立場に立って考える機会となりました。一泊二日の活動でしたが、現地での経験と被災者の思いを絶対に忘れず、今後も支援を続けたいと思います。

梅本 結奈

災害支援に「正解」がないことを実感しました。図書館の蔵書整理では、浸水した本とまだ読める本を分ける重要性に気づき、作業を工夫しました。また、資機材や防護用品の準備について、さらに学ぶ必要を感じました。現地の方々に「頑張れ」とは言えず、「踏ん張って欲しい」という言葉を選びました。困難な状況でも折れずに先を見据えた生活を続けてほしいと強く願っています。

熊田 隼翔

派遣先では、災害の深刻さと復興の難しさを肌で感じました。被災者の皆さんの並外れた精神力や「わざわざ来ていただいてごめんなさい」という言葉に触れ、胸が締め付けられる思いでした。また、自分の無力さや現状の厳しさを痛感し、もっと身体を鍛え、知識を増やし、自分にできることを広げたいと強く感じました。現地の状況を知り、今も闘い続ける方々への敬意を深めるとともに、早期復興を心から願っています。

篠田 倖代

今回の活動では、被災地での立ち屈振る舞いや周囲を見て行動する重要性を学びました。力だた本細や思い出の消える過程に触れ、復興の難しさを痛感すると同時に、作業が被災者の方々にとって辛い時間になることも感じました。被災した家の掃除では、整理後の変わり果てた部屋を見つめる姿に心が締め付けられましたが、直接感謝の言葉をいただき安心しました。この体験から、自分の行動が誰かの助けになる責任を感じ、次回はさらに多くのことに挑戦したいと思います。

中島 南瑞菜

仲間との協働の大切さを学びました。当初、学年の異なる方々との接し方に戸惑いがありましたが、作業を進めるうちに壁を感じなくなり、楽しく活動できました。また、地域の方々とのコミュニケーションでは、自分の思いを自然に伝えられなかったため、事前の学習の必要性を強く感じました。被災されたにも関わらず笑顔で迎えてくださった地域の方々の姿に深く感銘を受け、将来、その感謝を無駄にせず、一人でも多くの命と心を救う救急救命士になりたいと決意しました。

沼澤 颯

今回の活動では、どれだけ自分が行動したかではなく、相手がどのように感じ取ってくれるかが重要であることを学びました。思い通りにいかないこともありましたが、正しいと思うことを前向きに取り組む姿勢が最も大切だと感じました。また、現場の雰囲気や改善点を共有することの必要性を強く感じました。被災者の方々が笑顔で挨拶を返してくださり、辛い中でも私たちを温かく迎えていただいたことに深く感謝しています。

比嘉 琥

地震に続く水害は被災者に大きな精神的ショックを与え、新たな復興の取り組みを進める輪島にとって大きな課題でした。初めて災害ボランティアへ参加して安全管理の重要性や、被災者への適切な接し方の重要性を学びました。また、現地の医療従事者の方は2度目の災害で少ない資源で多くの人々を救うため限界まで働いていたことも知り私は、被災地への医療支援の大変さと大切さを感じました。そして、災害医療に少しでも携われるような救急救命士になりたいと思うようになりました。まだまだ能登には支援が必要だと思い今後も復興支援に少しでも貢献したいと感じています。

深川 武彦

私は、相手のニーズに合わせて行動や発言をすることの重要性を学びました。被災者一人ひとりの感情を理解し、相手の立場に立った対応が必要であると強く感じました。また、チーム内での士気を高め、アイデアが出やすい雰囲気作りの大切さも実感しました。活動中、学生同士がメリハリをつけ、車内や宿舎内では院生や上級生がチームビルディングできるよい雰囲気を作り、一年生にも気遣いが感じられる場面が多くありました。この体験を通じて、災害現場での支援活動の本質を学ぶことができました。

松原 智輝

能登半島豪雨での支援活動を通じ、私たちは単なる復興作業以上の深い学びを得ました。被災地の方々の尊厳を守ることの大切さ、地域の絆の強さ、そして困難に立ち向かう人々の 復興していくカを目の当たりにしました。私たち学生ボランティアは、専門性と人間性を兼ね備えた支援の意味を、この体験から真に学びました。

三島 柚子

実際に現地に行くことで、ネットだけでは伝わらない現実を知ることができました。被災地の復興には、多くの時間と労力が必要で、一つの場所を復旧するだけでも想像以上に大変だと実感しました。また、高齢の方々にとっては、体力的にも精神的にも過酷な作業であることを目の当たりにし、支援の重要性を痛感しました。今後は、地元の方々との接し方を事前に学び、より効果的に支援できるよう準備をしたいと感じました。